

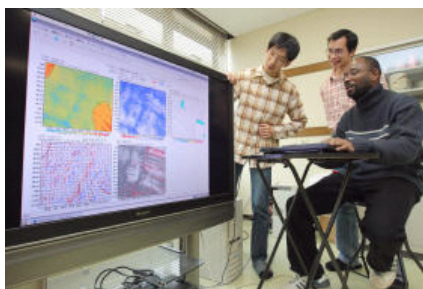
## 「異国のサムライ」研究の合間縫い猛げいこ



面の奥でスティービーさんの目がキラリと光り、甲高い声とともに激しい打ち込みを見せる。多くの部員に囲まれながら、熱のこもったけいこが続く＝東北大川内北キャンパス



「短い期間だが、しっかり学んでほしい」と身ぶりや英語を交えて指導する遠藤師範（左）。歴戦の剣士の助言にスティービーさんは笑顔で耳を傾ける＝東北大川内北キャンパス



専門の気象学では博士号を持ち、同僚の研究者からも勉強熱心と評判だ。持ち前の体力とまじめな性格で研究と剣道を両立させる＝東北大学院理学研究科

「キュー、メーン、ドゥー」。東北大川内北キャンパス（仙台市青葉区）にある同大剣道部の道場で、異国の剣士が鋭い掛け声と竹刀の音を響かせる。フランス人のスティービー・ロクロールさん（31）。大学院で気象学の研究を続ける傍ら、本場の剣道を体得しようと厳しいけいこに励んでいる。

スティービーさんは、カリブ海に浮かぶフランス治権下の海外県・グアドループ島の出身。高校卒業後、留学先のカナダで宮本武蔵の伝記を読み、「素朴でまっすぐな武士の生き方」にあこがれて剣道を始めた。ビデオや専門書で技を学び、カナダやフランス、スペインの道場で腕を磨いて、剣道三段を取得した。

東北大での国費留学期間も残り1年。研究の合間を縫って熱心に道場へ通う日々が続く。振りが速く力が強いと剣道部でも一目置かれる存在で、師範の遠藤勝雄さん（68）は「もう四段の腕前だ」と太鼓判を押す。

「連続技や体当たりが難しい。集中力を持続するのも大変」とスティービーさん。将来は母国で研究者の道を歩みながら、多くの人に剣道を教えるのが夢だ。文武両道を突き進む“サムライ”が、仙台で学んだ剣道を海外に広める日は近い。（写真部・川村公俊）

2009年04月07日 火曜日

Copyright © The Kahoku Shimpo